



講演録

開催日時:令和元年11月12日(火) 13:00-15:30

会 場:イイノホール

テ ー マ:文化芸術立国の実現に向けた指定都市の役割～文化芸術がもたらす都市の豊かさ～

内 容:

＜基調講演＞残間里江子氏「文化芸術が持つ力」

＜パネルディスカッション＞「文化芸術立国の実現に向けた指定都市の役割」

指定都市市長会会長・林文子横浜市長

指定都市市長会副会長、文化芸術・教育部会長・門川大作京都市長

秋元克広札幌市長

渡辺氏（司会）：みなさま、こんにちは。本日は指定都市市長会シンポジウムにお越しいただきまして、誠にありがとうございます。早いもので、今年もあと2か月を切りました。このような快晴の日にたくさんお運びくださいましたことを心から御礼を申し上げます。ご挨拶が大変遅くなりました。本日の司会・進行を務めますアナウンサーの渡辺真理と申します。よろしくお願いを申し上げます。

（拍手）

渡辺氏（司会）：それでは、まず開会にあたりまして、指定都市市長会のご紹介を申し上げます。指定都市市長会は全国に20ある指定都市で構成している団体です。その始まりは古く、昭和23年1月の、横浜市、名古屋市、京都市、大阪市、神戸市によりまず5大市共同事務所の設置までさかのぼります。

その後、各地の大都市が指定都市として加わりまして、平成15年12月に現在の指定都市市長会が発足いたしました。主な活動としては各市の連携を図りながら地方分権改革の推進や多様な大都市制度の早期実現に向けて、制作提言などを行っております。

さらに、先日の台風第15号や19号など大規模災害の発生時には、指定都市が一体となって連携を図り、被災地に対する支援に取り組んでおります。

この詳細はお手元にお配りいたしました、水色のリーフレットに書いてございますので、どうぞご覧いただければと存じます。

それでは、開会に先立ちまして、主催者を代表し、指定都市市長会会長林文子横浜市長よりみなさまにご挨拶を申し上げます。林市長、よろしくお願いいたします。

（拍手）

林氏：みなさま、こんにちは。指定都市市長会の会長を務めております、横浜市長の林文子です。大変お忙しい中、指定都市市長会シンポジウムにお越しいただき、本当にありがとうございます。

本日のテーマは、「文化芸術立国の実現に向けた指定都市の役割」です。昨年、閣議決定された文化芸術推進基本計画では、副題として、「文化芸術の多様な価値を活かして未来をつくる」と謳われております。文化芸術には、観光や集客、新たな産業振興といった都市の活力を高める力があります。国内外の都市では、文化芸術を活かした都市の新たな価値や魅力を生み出す取り組みを進めています。

また、文化芸術は成熟社会を迎えるこの時代において、おひとり、おひとりが生活の豊かさを感じられる社会を醸成するために大変重要です。次世代を担う感性豊かな子どもたちを育成していく上でも、欠かせない大切なものです。何より子どものころから美しいものに触

れて、心を揺さぶる経験を通じた感動は、大人になっても決して色あせることはありません。私は文化芸術には、人生の喜びや楽しみを分かち合い、多様性を受け入れ、人を思いやる心の大切さなど、真に心豊かな社会をつくりあげる大きな力があると信じています。

文化芸術の可能性を最大限に活かして、豊かな未来をつくるため、全国 20 の指定都市では多彩な芸術フェスティバルの開催、伝統芸能や文化財の保存・活用などに力を注いでいます。指定都市市長会としても、文化芸術・教育部会を立ち上げ、門川京都市長を中心に文化芸術の振興に関する国への提言や研究活動などを行っています。

圏域の中核である指定都市は、文化芸術立国の実現に向け、日本をけん引していく十分な力を持っていると考えています。文化芸術を通じて、すべての方々の心豊かな暮らしを実現できるように、指定都市市長会として引き続き、力を尽くしていきます。是非ともお集まりのみなさんにも変わらぬご支援をお願いします。

本日のシンポジウムは文化芸術がもたらす都市の豊かさについて、みなさまとご一緒に考える機会としています。実りあるものになりたいと存じますので、どうぞ、よろしくお願いいたします。

本日は、ご来場ありがとうございます。

(拍手)

渡辺氏（司会）：主催者を代表しまして、指定都市市長会会長林文子横浜市長よりご挨拶を申し上げました。それでは早速、基調講演を賜れればと存じます。本日は、残間里江子様より「文化芸術が持つ力」と題しましてご講演を頂戴いたします。残間様は仙台市仙台にお生まれになり、アナウンサー、雑誌記者、編集者を経て、1980 年に企画制作会社を設立。雑誌「F r e e（フリー）」編集長、出版、映像、文化イベントなどを多数企画主催なさっています。2005 年、「愛・地球博」誘致総合プロデューサーとして活躍され、2007 年にはユニバーサル技能五輪国際大会総合プロデューサーをお務めになりまして、この時には 29 万人を超える来場者を記録しました。

2009 年には既存のシニアのイメージを払拭した「新しい日本の大人像」の創造を目指しまして、会員制ネットワーク club will be を設立。現在実名登録会員数は 13,000 人を超えているということです。

財務省財政制度等審議会、文部科学省生涯学習審議会委員など、行政諸機関の委員を数多く歴任なさっていて、1998 年から 10 年間にわたって、国土交通省社会資本整備審議会委員として新河川法制定にも関わられました。

2007 年から男女共同参画推進連携会議委員、男女共同参画に関わるご講演も数多く、近著には『もう一度花咲かせよう』『閉じる幸せ』などをお持ちです。

それでは、ご登壇いただきますので、どうぞ、大きな拍手でお迎えください。残間様お願いいたします。

(拍手)

残間氏：私は1950年代、まだ日本全体が貧しかった時代に仙台で生まれました。体が弱く、小・中学生時代は病院で長く過ごしました。そんな私を励まし、生きる活力を育んでくれたのが芸術や文化です。

仙台で母と出かけた童謡コンサートやお祭り。静岡での芸術好きな友達との交流。そして、あちこちに文化や芸術が息づいていた横浜の街。そのような自分を取り囲む環境から、大きな影響を受けて育ちました。

今、指定都市がネットワークを組み、文化芸術の推進に取り組んでいます。でも、ほかの多くの市区町村のホームページを見ると、文化芸術はほかの優先する課題、とりわけ経済的な豊かさが実現した後に余力でやるもの、と捉えている印象を受けます。

私は、文化や芸術は経済の対立概念ではないと考えています。文化芸術こそ、経済も含めた本当の意味での豊かさの源泉だと思うのです。文化芸術はすべての人の人間力を培う、母なる大地のようなものだと思います。ですから、むしろ解決すべき課題のすべてに文化と芸術を掛け合わせるくらいの気持ちが必要だと思うのです。

私は、芸術家でなくても誰もが創造的になり、今の社会にないものをつくりだすことが当たり前になるべきだと思います。そのためにも政治や経済を担う人こそが、文化的になる必要があります。フランスでは政治家が文化の愛好者だったり、芸術家だったりします。日本でも最近、政財界の方がオペラやクラシックのコンサートに足を運ぶようになったことは、よい傾向だと思います。

時々、政治家や財界人から「感性を磨くにはどうしたらいいか」と聞かれます。感性を研ぎすますにはたくさんのものを見聞きするなど、場数を踏むしかないと思います。文化芸術は、自分の五感で体験することが何より大事です。

まだまだ私たちがよく知らない文化芸術はたくさんあるはずです。指定都市市長会のみなさんには、そんな私たちが今まで見るができなかったものを楽しめる環境を、整備していただきたいと思います。

私はこれまで、雑誌や映画の制作、街づくりやイベントのプロデュースなどに携わってきました。新国立競技場を設計した建築家の隈研吾さんらと脱団地を掲げる公共住宅もつくりました。私が何かをプロデュースするときに目指すのは、今までにない発想を世の中に提示することで、その結果誰かが自由になったり、幸せになったりすることです。

今は、若い人たちに何を残し、時代をどうバトンタッチしていくかを考えています。シニア世代が大人文化の創造を目指す会員制ネットワーク「クラブ・ウィルビー」を設立し、様々な文化活動も行っています。皆様とともに文化芸術を通して日本をより美しく、よりすばらしい国にしていきたいと思っています。

渡辺氏（司会）：ありがとうございました。残間里江子さんにご講演を頂戴いたしました。仰る通り文化芸術が持つ力と題してご講演を頂戴いたしましたけれども、その文化芸術を持つ力ということを言葉にしなくても、肌でみなさまが日々感じられるような世の中になっていけば、そんな願いをこめながらの、とても内容の濃い、でも残間さんらしい非常にわかりやすく丁寧なご講演を頂戴いたしました。

この後、20分ほどの休憩とさせていただきます。パネルディスカッションですが、14時15分からの開始を予定しております。お時間までにお席にお戻りくださいますようお願いをいたします。会場内でのご飲食、喫煙はどうぞご遠慮くださいますようお願いをいたします。それでは休憩といたします。よろしくお願いいたします。

渡辺氏（司会）：お待たせいたしました。これよりパネルディスカッションを始めてまいります。ここからは『文化芸術立国の実現に向けた指定都市の役割』と題しまして、圏域の中核都市として指定都市が果たすべき役割などについて、市長お三方によるパネルディスカッションを行ってまいります。早速、御登壇いただきます林市長、門川市長、秋元市長よろしくお願いいたします。拍手でお迎えください。

（拍手）

渡辺氏（司会）：まずは、指定都市市長会の会長であり、開会の挨拶も行いました横浜市長林文子市長です。

（拍手）

渡辺氏（司会）：続きまして、指定都市市長会の副会長で、文化芸術・教育部会で部会長を務めます京都市の門川大作市長です。

（拍手）

渡辺氏（司会）：そして、札幌市の秋元克広市長です。

（拍手）

渡辺氏（司会）：どうぞ、お三方御着席くださいませ。よろしくお願いいたします。私も大変失礼いたしますが、こちらに座らせて始めさせていただきます。よろしくお願い申し上げます。ディスカッションに入ります前に、まずは、皆さまと国の文化政策の概要などを簡単

に見てまいりたいと存じます。後ろにスライドが映し出されますのでご注目くださいませ。まず、2001 年ですが、心豊かな国民生活や、活力ある社会を実現するため文化芸術の振興に関する基本理念などを定めた「文化芸術振興基本法」が施行されました。また、この法律に基づいて文化芸術の振興に関する基本的な方針が定められ、文化芸術の振興に関する施策が進められてきました。本日のテーマになります「文化芸術立国」という言葉も、この 2007 年に出された方針に出てまいります。

そして、2017 年には、法改正によりまして名称を新たに「文化芸術基本法」とすると共に、基本理念にも新たな項目として「年齢・障害の有無、または経済的な状況に関わらず、等しく文化芸術の観賞等ができる環境の整備」ですとか「関連する施策との有機的な連携」、こういった内容が定められました。また、この法改正では、関係する省庁の施策を含めた「文化芸術推進基本計画」を国が策定することになりまして、2018 年にはその第一期となる計画が定められました。この中では、ご覧の四つの目標、そして六つの戦略が打ち出されています。

さらに、2017 年には「文化経済戦略」が定められました。この中では「文化を起点に新たな価値が作り出され、それが文化へ再投資されることで持続的な発展につながる好循環が生み出される」という姿が描かれています。このほか、文化庁においては京都への移転と共に機能強化を図ることとされています。

ここまでは国の法律や計画などをご覧いただきましたが、続いてのスライドでは「日本と外国の文化予算の比較」をご覧いただきます。このように、多い所では韓国が 1.14%、フランスが 0.93%、対しまして日本は 0.11%となっています。文字で説明がありますように、この数字というのは国家予算の比較で、もちろんそれぞれの国によって状況も違いますため、単純に比較することはできないんですが、数字としてはこのようになっております。

それでは、前提としての説明は以上にいたしまして、早速ディスカッションに入ってまいりたいと思います。本日は二つのテーマについて各市長からお話を伺いたいと思っております。まず、各市の「文化芸術施策の取り組み」についてお尋ねいたします。続いて「文化芸術立国の実現に向けて指定都市が果たすべき役割」をどのように考えていらっしゃるのかお伺いできればと存じます。それでは、早速、林市長お願いいたします。

林氏：はい、ありがとうございます。先ほどの残間さんのお話には、私も本当に胸を打たれました。人々がどう捉えていくか、日常の生活の中でいろいろなことに触れて興味を持つというお話、私自身、思い当たる節がございます。

さて、横浜市は、今年で開港 160 年です。震災や戦争、米軍の接收、人口急増など、幾多の苦難を乗り越えてきた街ですが、今、おかげさまでウォーターフロントの美しい景観、グルメ、ショッピングなど魅力溢れる都市に成長してきました。

しかし、私は、市長に就任した時から、横浜には足りないものがあると考えていました。それは劇場が全くないということです。

「神奈川県民ホール」や「神奈川芸術劇場」は、県のもので。「関内ホール」は、戦前「横浜宝塚劇場」という映画館でした。これを改装して劇場にしましたが、約 1,000 席でほとんど舞台の奥行きがありません。そのため、コンサートは出来ても舞台芸術というのは全くできません。「横浜みなとみらいホール」という音楽専用ホール、それから「パシフィコ横浜」の中に 5000 席の大きなホールがございます。しかし、どちらも奥行きがほとんどなくセットが組めません。

それから、横浜は、2001 年から『横浜トリエンナーレ』という現代アートの祭典を開催しております。しかし、横浜の街には来客が少ないと思い、どうしたら人を呼べるか、子どもたちも大人たちも一緒になってワクワクできるものは何かと考え、2012 年に動的な芸術フェスティバル、『Dance Dance Dance @ YOKOHAMA』を開催しました。当時は、先ほど、残間さんのお話にもありましたように、芸術 vs 経済ということで、いろいろな意見もありましたが、開催させていただきました。

トリエンナーレは、「3年に一度」という意味ですが、横浜トリエンナーレ、次にダンスフェスティバルを開催したので、「3年に1回ずつ回していこう」と、翌年に『横浜音祭り』を始めました。これらの特徴は、オールジャンルの踊りや音楽を街中で繰り広げるという考え方です。総花的で薄まってしまうという懸念もありましたが、結果的に大成功し、今はおかげさまで世界的にも知られるようになりました。横浜以外の街からも皆さんに来ていただいています。現在『音祭り』を開催しており、ちょうど『ラグビーワールドカップ』の時期と重ね、相乗効果を得ています。

『横浜ベイサイドバレエ』は、海のほとりに大舞台を作って行っており、今は大変人気があります。これは苦肉の策、つまり、踊る場所がないから外で行っています。横浜の特徴を生かすために、このようにしたのですが、大変だったのは、雨が降るとできないということです。ところが、逆に人気が出ました。

「音祭り」では、葉加瀬太郎さん、May J. さん、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団、村治佳織さんにもご出演いただき。大変人気が出てきており、今回は、英国ロイヤルオペラも参加してくれることになりました。

さて、この文化芸術の取組により、過去3年間の来場者数は、合計 234 万人、121 億円の経済効果を生み出すことになりました。トリエンナーレは、26 万人でした。これだけの方たち、老若男女がいらっしゃるということは観光消費額も上がり、街の賑わいの創出につながります。

横浜は、子どもたちに貴重な体験をさせたいと、オーケストラ鑑賞授業を1時間やっておりますが、そこにミュージカル鑑賞授業も加えました。

それに加え、バレエを見せる授業も始めました。総合舞台芸術の最高峰は、オペラとバレエと言われております。バレエを見せる授業は、最初は、いろいろなご意見をいただきましたが、説得を続け、遂に今年から始めることができました。6,000 人の枠に対し 12,000 人の応募がありました。来年分の申込みは、約 18,000 人の子どもたちが手を挙げています。と

にかくやり続けること、諦めないということが非常に大事だということを私は覚えました。さて、「文化芸術の街づくりの取り組み」ですが、今、横浜では「ナイトイベント」を行っています。昔、石原裕次郎さんなどが人気の時代は、本牧というと風情があったのですが、今はまったく変わってしまいました。夜の横浜は、9時を過るとホテルのカフェも寂しくなります。そこで、『NIGHT SYNC YOKOHAMA』というイルミネーションとプロジェクトマッピングを同時に行うイベントを行っています。

将来を見据えていくためにも、文化・芸術は欠かせません。経済政策と切り離すものではないです。相乗効果で、残間さんがおっしゃったようにむしろ核となるものです。

調査では、横浜市民の57%は劇場に足を運んだことがありません。また、劇場に足を運んだことがある方内、横浜で見る方が27%しかいない。ほとんど東京に行っています。東京と横浜の税収格差も大きい状況であり、横浜は、この文化芸術を核に取り組んでいきます。

(拍手)

渡辺氏（司会）：ありがとうございます。新たに予算を当てるとするのは本当に大変なことだと思いますし、また、その中で芸術フェスティバルの開催ですとか、子どもたちに本物の体験を、まさにさまざまな取り組みを多角的になさっているということが、短い時間の中ではありましたけれども伝わってまいりました。林市長がおっしゃるように、その文化芸術は都市の成長の源であるんだと、このような信念も伝わってまいりました。では、秋元市長、続きましてよろしく願いいたします。

秋元氏：はい、皆さまこんにちは。札幌市長の秋元克広でございます。今日はこうした場面の中で、札幌の取り組みなどをご紹介できる機会を頂戴できましたことをあらためて感謝申し上げたいと思います。札幌の「文化芸術施策」をご紹介していきたいと思いますが、本日は二つの切り口からお話させていただきたいと思っております。

皆さん、札幌といいますと何を思い浮かべるでしょうか。ジンギスカンとか、スープカレーとか、お寿司がおいしいとかビールがおいしいとか、どうしても「食」というものが切り離せないんじゃないかなと思いますけれども。この写真の中にもございましたが、非常に市街地に近い所に自然があるということで「豊かな自然環境」というものも一つの大きな特色だというふうに考えております。この「豊かな自然と、芸術、文化の融合による取り組み」ということをお話しさせていただきます。

最初は皆さまご存知の『さっぽろ雪まつり』であります。雪と氷の芸術展とも言える「雪まつり」でありますけれども、第一回目は69年前、1950年にさかのぼります。

当時、大通公園は、実は市民の雪捨て場でございまして、その雪捨て場に捨てられた雪を使って、三つの高校、二つの中学校の生徒らによって六基の雪像が作られたというのがスタートです。スライドにありますのが、ちょっと見づらい部分はありますがクマの雪像でありま

して、せいぜい、当時は3メートルから6メートルぐらいの小規模なものでしたけれども、とはいえ雪だるまは誰でも作れるかもしれませんが、市民が鑑賞できるような雪像を作るという経験は誰にもありませんでしたので、当時、学校の美術の先生がこの陣頭指揮を取って、大変悩みながら進めていたというのが一回目であります。

この一回目を終わらして、当時はまだまだ明かりも少ないという状況でもありましたので、冬というと暗く、長く、寒く、そういった厳しい冬ではありますけれども、ただ捨てるだけだった雪を「雪像」ということでアクセントを付けてくれたこの「雪まつり」に、札幌市民も大いに期待を持つようになりまして年間行事として定着するようになりました。今年70回目を迎えます。来年2月は71回目になります。今では幅20メートル、高さ15メートルほどの、雪だけで作る大雪像がございます。それから市民が作る小雪像、これが大通公園の約1.5キロにわたり並びます。最近ではプロジェクションマッピング、拡張現実、ARといった新しい技術を使って「雪とアートを融合した展開」というものも進んでいるところでもあります。

次にご紹介するのが『札幌芸術の森』です。「大自然の中に創造性に満ちた芸術環境を作ろう」ということをコンセプトに1986年、昭和61年に一部施設をオープンしまして、全体が完成するまで3期15年をかけました。

このスライドに掲載した写真は野外美術館でございます。春にはサクラやコブシ、夏は豊かな緑、秋は紅葉の中で彫刻観賞ができるということでありますし、この作品には直接手を触れることも可能であります。冬は無料開放をしております、ちょっと右側でございますけど「輪かんじき」、靴が沈まないようにかんじきを履いてこの鑑賞をしていただくというようなことを楽しんでいただいております。

この野外美術館のほかに、敷地内には屋内美術館、さらに大小さまざまな練習室を備えたアートホール、野外ステージなどの多様な施設がございます。豊かな自然環境の中で美術鑑賞はもちろん、さまざまな市民の活動を支える発表の場、練習の場にもなっている所であります。

「豊かな自然と文化芸術」ということで、もう一つご紹介したいのが『モエレ沼公園』であります。彫刻家の伊サム・ノグチの基本設計によりまして、「公園全体を一つの彫刻作品にする」というコンセプトの元に造成が進められました。この公園の造成前の写真が左側にございますけれども、これは不燃ごみ、燃やせないごみの埋め立て処分地でありました。

昭和40年代後半から50年前半にかけて人口が急増しましたので、札幌市内では埋め立て処分地を作る、確保するということが大変難しいことでありまして、その際にこの場所を確保するには地域の方のご了解をいただく、そして「将来的にはここを公園にしますよ」ということで土地を取得しまして造成が進められました。ごみ処分地としては1979年から1990年までの12年間活用しまして、その後ここを公園として2005年にグランドオープンをしたところでもあります。

モエレ沼公園の面積は約189ヘクタール。東京ドームの40個分にあたります。この中に山

や噴水、ガラスのピラミッド、遊具などが配置されまして、毎年9月には『芸術花火プログラム』、こういったものが繰り広げられておりまして自然とアートが融合した公園となっております。

そして、このごみ処分場の跡地を公園化したということのほか、施設の中に『ガラスのピラミッド』がございますが、ここには冬の間の雪を蓄積しまして、夏の間の冷房に使っているということで、自然環境保全の観点も備えた公園となっております。

次にもう一つの切り口でございます。「心豊かな暮らしを実現するための文化芸術」ということで代表的な取り組みを紹介させていただきます。先ほど、この幕間で紹介、映像が流れておりました『PMF（パシフィック・ミュージック・フェスティバル札幌）』であります。

『PMF』は毎年夏の札幌を中心といたしまして、約1カ月間欧米のトップオーケストラで活躍をしている音楽家を教授陣に迎えて、世界各国からオーディションで選ばれた約100人の若手音楽家の育成を行うクラシックの音楽教育祭でございます。1990年に20世紀を代表する指揮者、作曲家、そして教育者としても知られているレナード・バーンスタインの提唱によって創設されたものであります。今、世界三大教育音楽祭の一つと言われるまでになりました。アメリカの『タングルウッド音楽祭』、ドイツの『シュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭』、これに並ぶ三大教育音楽祭とまで表されるようになりました。この『PMF』の創設の経緯というものを少しご紹介したいと思います。

当初、この音楽祭は北京で開催される予定でありました。開催間近の1989年、平成元年の6月に天安門事件が起きました。音楽を通じた世界平和の提唱者であるバーンスタインは、中国でのスクールということを止める表明をいたしまして、北京の代わりに札幌が候補に上がって、開催の約8カ月前、1989年10月に札幌で受け入れるということが決まったものであります。

札幌が選ばれた理由といたしましては、夏場の日本国内は湿気が非常に高いわけですから、そういう意味では乾燥した空気、楽器をメンテナンスしやすい湿気の少ない爽やかな気候、そして野外コンサートということを考えますと、ほかに、北海道以外になかなかやる場所がなかったということだったんだろうと思います。そして先ほどお話をさせていただきました『芸術の森』が建設中だということもありまして、ここの野外ステージをメインのステージ会場として使うことになりました。

バーンスタインは既に、この6月に来たときには病魔に犯されておりまして、その年の10月に帰らぬ人となりました。2回目からは、このバーンスタインの意思と夢を引き継いで札幌市が主体となって続けて、今年で30回目を迎えたということになっています。

『PMF』のパシフィック、これは太平洋という意味がございますし、元々の意味は「穏やか」「平和」ということであります。まさに環太平洋地域の若手の音楽家たちが技術の向上を図りながら、国籍、言語、宗教を越えて一つの音楽を奏で、やがてそれが平和につながるようにというバーンスタインの願いから生まれたアジア初の「国際教育音楽祭」を札幌で開催し続けてこられたこと、そして世界の若手の音楽家を育成すること、それを続けてこられたと

いうことは大変嬉しく思っているところであります。

会期の終盤には北海道以外でも開催しております。今年の東京公演「サントリーホール」には、上皇、上皇后両陛下にもご臨席をいただいたところであります。ぜひ、皆さま方にも、この『パシフィック・ミュージック・フェスティバル札幌』というものを知っていただいて、足を運んでいただければと思います。

そのほか、ご紹介させていただきたいものに『札幌市民交流プラザ』というものがございすけれども、文化芸術活動がもつ創造性を「経済の活性化」にもつなげ、更には、「創造都市」の取組を札幌で推進していきたいと思っているところであります。これからも「文化芸術」というものと、さまざまな「経済活動」というものをつなげて、日本全体の文化の発展に貢献していければと思っております。以上であります。

(拍手)

渡辺氏（司会）：ありがとうございます。雪まつりの発祥から始まりまして、まさに札幌ならではの、その場所ならではの魅力的な取り組みを数々ご紹介いただきました。そして、未来へつなげていく経済効果も含めての意気込みということもお話いただきました。ありがとうございました。それでは、門川市長お待たせいたしました。よろしくお願いいたします。

門川氏：はい、ありがとうございます。横浜、札幌、それぞれに素晴らしいなと思って聞かせていただきました。京都市は、「文化力」「地域力」何よりも人々の「人間力」を生かして、文化を基軸とした都市経営をしていこう、そんな取り組みをしてきました。そんな中で、国連が定めました「SDGs」について、「誰一人取り残さない」、「全ての人に健康と福祉を」、「質の高い教育をみんなに」、そして経済の発展と環境をしっかりと一致させる 17 の目標ですが、全国 815 の市・区を対象に 74 の指標で行われた日経新聞「全国市区・サステナブル度・SDGs 先進度調査」において、京都市が 1 位の評価をいただきました。

この指標の中には経済もあります。財政もあります。京都市は、中小企業が厳しい、伝統産業が厳しい。京都は 99.7%が中小企業です。そして 70%の人が中小企業で働いています。中小企業は宝ですが、経済の厳しさがあります。もちろん、素晴らしい企業もあります。景観規制等も厳しい。財政もきずられて厳しい。それらを越えて持続可能度、SDGs 度が 1 番という評価は、市民の皆さんの「文化力」「人間力」の賜物だなと感じて喜んでおります。

さらに、民間シンクタンクが全国主要都市 72 都市の特性を調査された「都市特性評価」においても、「文化・交流」や「研究・開発」等の分野で高く評価されて 2 年連続で総合 1 位になりました。

もう一つは「レジリエント・シティ」。ちょっと聴き慣れない言葉と思いますが、世界 100 の持続可能な都市を作っていこうということでロックフェラー財団が公募されました。10 倍超の競争率でしたが、パリやニューヨーク等と一緒にレジリエント・シティに選ばれまし

た。自然災害やテロといった『ショック』、見えない危機、コミュニティの弱体化、少子化、あるいはインフラの老朽化といった『ストレス』。それらにしっかりと対応して、しなやかで強く、持続可能でより魅力的なまちを作っていこう。こうしたことに取り組んでおります。京都は千年を越える悠久の歴史を誇ります。世界に歴史都市はたくさんありますが、「150 万規模の都市で千年を越えて一度も文化が遮断されていない継承されている町というのは極めて珍しい。いや、あるいは唯一かもしれない」といった評価も受けています。そのような中で、41 年前になりますが、京都の最上位の都市理念としまして『世界文化自由都市宣言』を行いました。桑原武夫先生や、裏千家の千玄室大宗匠などが起草されました。

都市は理想を必要とする。全世界のひとびとが、人種、宗教、社会体制の相違を超えて平和のうちにここに自由につどい、自由な文化交流を行う。千年を越える文化を誇るが孤立して生きてはいけない。永久に新しい文化都市でなければならない。そんな高らかな宣言が行われてます。

当時、東西対立の時代でした。しかし、宣言では、今の時代を見据え、社会体制や民族、宗教によって対立が起こる、こういうことを予想している。そんな先見性もありながら、それを超えて平和に貢献していこう。そして文化を基軸とした都市づくりをしてきたその延長に、オール京都で、関西、また皆さん方のご支援の元に取り組んだ文化庁の機能を強化しての全面的な京都移転もあると、このように考えており、より文化を基軸とした都市経営を徹底していかなければならないなと思っています。

20 年前、京都はバブル経済がはじけ、工場や大学が移転し、文化の創造力、発信力が低下する等、極めて厳しい状況でしたが、あえて、「文化を基軸にしていこう」、そんな都市経営をしてきました。特に文化と景観と観光。観光は奥の深い観光をしていこう。景観は景観政策を 13 年前からやりました。全国では建物の高さ規制をどんどんと緩和していく。しかし京都は、小さな東京になつてはならないということで、45 メートルのところを 31 メートル、31 メートルのところを 15 メートル、こういう取り組みをしました。さらに看板。この 10 年間で 30,800 の建物から撤去・是正していただきました。屋上の看板、チカチカ光る看板、派手な看板、全部撤去していただきました。非常に反対運動、抵抗、厳しかったです。しかし、そこに暮らす子どもたちが…先ほど「感性」という話がありました。庭園や美術館に行くかという、滅多に行かない…しかし、毎日毎日歩いている道にすてきな看板がある。ガラガラ光った看板はない。「こんな町づくりをしたら、きっと訪ねる人も、そこで育つ人もいい感性が育つに違いない」。こんな思いでやってきました。

そして「文化を基軸とした都市経営」「人間の尊厳を認め合う」「地域コミュニティを大事にする」「世界の平和に貢献していく」。例えば消費者行政、「賢い消費者になりましょう」「騙されない」、それも大事ですね。しかし「すぐ捨てるような物は買わない」「ペットボトルの水は飲まない」、これこそが賢い消費者。もっとも生産者と消費者という言い方がいいのかどうか分かりません。生活者としてあらゆる社会的課題に挑戦していく、そんなことが文化を基軸とした生活ではないかなということで、京都市では、3 つの方針を出しています。

一つ目の方針は、文化による「新たな経済的価値の創出」であります。「新・文化庁」も文化財の保存、そして保存のためにも活用ということを言われています。首里城が大変なことになりました。ノートルダム寺院が大変なことになりました。しかし、しっかりと再建しなければならない。例えば京都の金閣寺が燃えました。しかし世界遺産です。しっかりと保存され、そして創建時の技術が、材料が継承されている。日本の文化財というのは全てと言っていいぐらい木と土と紙です。必ず朽ちていく。それを守っていくというのは、その価値をしっかりと認識して担い手を育てていく。これを守っていくというのは大変なことでもあります。そのためにも生かしていこう。

また、国際的なアートフェア『artKYOTO』（アート京都）というのをやりました。要はアート作品を売ることです。美術館、博物館で感動されます。でも買わない。したがって芸術家の暮らしが楽にならない。徹底して売ることに重点を置こうということで二条城で3日間、5億円以上売れました。感動を買ってください。そして家で、会社で飾ってください。このような取り組みもしています。

京都は芸術系大学だけでも6つぐらいあります。学生さんが頑張っている。しかし学生さん、あるいは卒業された方の作品はすぐには売れない。アートオークションをやっていこう。芸術系の学生さん、卒業生が一生懸命飲食店で皿洗いをされている…これもいいですけどね、作品をどんどん買うということ、アート市場の活性化が大事じゃないかな。

そして『KYOTO STEAM－世界文化交流祭－』というのもやっています。芸術と科学、技術、工学、そして数学。そうしたものを融合した新たな取り組みを5年計画でやっています。

二つ目の方針は、「地域共生社会の実現」であります。オペラやコンサートは今までもやってましたが、3年計画で小学生全員が茶道の体験をする。3年計画で中学生全員が華道の体験をする。京都の代表的な流派の皆様がボランティアで、そして生け花代は京都市が出すということで始めました。やんちゃな男の子が中学校で一生懸命生け花を生ける。それを家に持って帰ってお父さん、お母さんに。そして仏壇があったら仏壇に、神棚があったら神さんに、床の間があったら床の間に。そういうことをやって、もう少ししたら「京都で育った子どもはちょっと所作が違うな」。華道で、茶道で、姿勢を大事にする、人を大事にする、そんなことをしていきたいと思っています。

そして三つ目の方針が、「都市間の文化交流の更なる発展」であります。

最後になりますけども、京都市の交響楽団というのがあります。日本で唯一の自治体直営のオーケストラとして創設されました。私が楽団長をしております。また札幌にも行かせていただきたいな。横浜にもいかせていただきたいなと思います。ありがとうございます。

（拍手）

渡辺氏（司会）：ありがとうございます。まさに京都は文化の担い手でらっしゃるということとは言わずもがななんですけれども、その伝統を守りながら未来にどのようにつなげてい

くか、その精神の部分というのを聞かせていただいたような思いでございます。ありがとうございました。

続きましては、今回のテーマであります「文化芸術立国」を実現するために、圏域の中核都市である指定都市にはどのような役割があるとお考えかを各市長に伺えればと存じます。続けてで恐縮でございますが門川市長からよろしくお願いいたします。

門川氏：ありがとうございます。林会長の提言で、指定都市が「文化芸術立国」に役割を果たしていこう。そして地域の中核都市である指定都市が周辺市町村と水平連携をしながら、また 20 の指定都市がしっかりと連携し取り組んでいこう。こんなことで文化芸術・教育委員会を作っていただきました。そして、国に対して提言させていただきました。

持続的な文化芸術への投資、文化財の保存と活用の好循環の創出、さらに「支え手」と「担い手」の育成、生活文化の振興、共生社会の実現、「新・文化庁」のさらなる機能強化。これらによって、多様性と包摂のある「文化芸術立国」を目指すという提言をさせていただきました。

京都のことでちょっと例を申し上げたいと思っております。「京都は観光都市ではない」。このことを私はかねてから言っております。ちょっと誤解される方もあるのですが、京都が今、お寺や神社、あるいは文化芸術、さらに食文化、町家など、いろんな所で観光的にも評価されています。しかし、これらは観光のためにできた物ではありません。「京都に伝わる日本の心」、これが観光的にも評価されている。したがって「市民生活の中の文化」というもの、「自然との共生」、こうしたことをしっかりと生かさなければ文化としての都市の持続性もない。同時に観光も大事にしてきたおもてなしの町であります。また、「ものづくり都市」、伝統産業から iPS 細胞もつくるのが京都であります。さらにその背景には人々の幸せ、世界の平和を願ってものづくりが行われてきた。

「島津製作所」という会社があります。江戸時代には仏壇・仏具を作っていました。それが精密機器メーカーになっている。こういう会社があります。花札を作っていた会社が世界のゲームメーカーになっている。「任天堂」です。あるいはお酒からバイオテクノロジー企業になる。こういうことを大事にしていかなければならない。つまり、文化と社会貢献、社会的課題の解決、こうしたことが新たなイノベーションを起こしていく。そういうことだと思います。

そこで、今、新産業の創出ということで、スタートアップ・エコシステムということが非常に注目されています。日本にもシリコンバレーのようなものを作っていかなければならない。それで今、日本のあちこちの都市がそういう意味で注目されている。

シリコンバレーにあります「プラグアンドプレイ」(Plug and Play Tech Center) という 2000 社以上スタートアップを支援してきた所が京都に拠点を作られました。例えば「パナソニック」が家電のデザインセンターを京都に新設された。また、SNS の「ライン (LINE)」が新たな事業を展開するための研究開発拠点を京都に作られた。このように、今、国内外の

さまざまな研究開発、あるいはスタートアップの支援機関が京都に集中してきております。いろんな評価がありますが、一つは右脳と左脳の融合だと。

左脳は論理、サイエンス、テクノロジー、イノベーション。右脳は感性、アート、モチベーション。こういうようなものが融合したときに新たな発想が起こる。この大きな時代の転換期に、そういう右脳と左脳の融合が大事ではないかと感じております。私は京都市長なので京都のことを言っておりますが、日本中がそうだと思うんですね。日本の最大の強みは感性であり文化芸術である。

『衣食足りて礼節を知る』ということ、先ほど残間さんのお話にもありましたけど、しかし、日本は、例えば生活保護。「健康で文化的な生活を送る」と、「文化」が入ってるんですね。世界の、先ほどの「SDGs」の17の目標の中に「文化」がないんです。だから「SDGs プラスワン」といった言い方をしている。世界の人々は、17の目標、169のターゲットの中に文化がない。しかし日本は、生活保護の中に「文化」を入れた。「文化」がなければ幸せにならない。「安全で、きちんと食べるものを食べて」ではだめだという、これがすごさだと思うんですね。だから、いろいろな創造的なものづくりも、まちづくりも、国づくりも、これほど災害の多い列島の中で生まれてきた、絆も生まれてきた。だから、文化とアートとサイエンス、そこから新たな日本が、地域社会が起こっていく。

これから京都に来る文化庁は、生活文化、衣食住なんですね。「食育」というのが大分と評価されてきました。認知度が高まりました。次に、「服育」というのがあるんです。「襟を正す」とか「袖触れ合うも多少の縁」とか「折り目正しい」とか、これは全部服で教えるんですね。もう一つは「住育」。床の間がある、生け花がある、そして、ご先祖さんが祭られている。先祖に感謝する。そして地域社会を大事にして、みんながより良い生き方をしていこう。社会的な課題解決していこう。孤立や 8050 問題など、さまざまな問題がありますが、社会包摂、そして多様性を重んじよう。こんな地域社会をつくる。これはもう、まさに文化だ。だから、2050 年、CO2 をゼロにしなければ地球の未来も人類の未来もない。そういうことに挑戦していくのも「文化」だと、このように思います。

私たち京都には大きな意味で目標があります。JR 東海さんが「そうだ 京都、行こう。。」、これを世界に向かって「そうだ 日本、行こう。」へ。」「日本に、京都があつてよかった」、これを「世界に、日本があつてよかった」へ。」、日本が「文化」で世界の人々の幸せと平和に貢献していく、そんな「文化芸術立国」を目指して共に頑張っていきたいと思います。ありがとうございます。

(拍手)

渡辺氏(司会): ありがとうございます。門川市長がおっしゃるように、今、世界は「SDGs」に向けて中心に動いてまして、それはご存知のとおり金融も動き始め、アパレルも全部そこに向かって動いていますけれども、その中でも「文化」という視点というのはやはり京都な

らでは、まさに日本のですけど、日本発のリーダーシップというものをこれから世界に発信できるのでは…という力強いメッセージを感じました。続いては秋元市長お願いいたします。

秋元氏：はい、ありがとうございます。政令市、中核市としての役割という意味で、特に今回は北海道との関係でお話をさせていただきたいと思います。

北海道は非常に広大でありまして、本州の都市と違って、隣の県に行き来するというよりは、どうしても北海道の中でクローズしています。そういう意味で、北海道全体の中で札幌が果たす役割ということをお話しさせていただきたいと思います。

北海道の中に「道央圏」というのがございまして、札幌を含めまして8市3町1村からなるんですけども、ここに人口の約48%、事業所の売上額では55%ということで集中しております。そういう意味で道央圏が中心的な役割を果たしているわけなんですけど、ここを北海道全体のためにどう機能させていくのかということが私たちの非常に大きな役割だと思っております。文化面でもこの札幌の持つ機能を北海道全域に発展させていくという視点で物事を進めているところであります。

昨年10月に完成いたしました「札幌文化芸術劇場 hitaru」、ここは2300席ございます。北海道で初めてオーケストラピット、多面舞台を持つ舞台ができました。ここで本格的なオペラやバレエができるようになっております。それから世界水準のコンサートホールと評されております「札幌コンサートホール Kitara」、ここは2000席ございまして、音楽専用ホールという形になっております。先ほどの芸術劇場のほうは、多目的に使う劇場になってございます。

そのほかに、スポーツの会場がメインでありますけれども、大規模なコンサートなどが開催可能な「札幌ドーム」、ここは5万席ございますので、「嵐」のコンサートとか「ドリカム」のコンサートなどは「札幌ドーム」で行っております。そういう意味では、それぞれの用途、集客人数に合わせて使うことができる施設を保有しております。こういう大きな規模のものが札幌にありますので、札幌で公演をして、それが道内の、例えば旭川なり帯広で公演ができるということになっていまして、そういう意味では札幌にこういう施設があって、中核になって道内を回ることができる。このことで北海道全域の文化活動にも貢献できているのではないかなと思っています。

これから新しいMICE施設も整備することとしておりまして、最短で2025年に共用開始を目指しております。ここができましたと、これまでカバーできなかった3000～5000というような規模のイベントをカバーできると思っています。

ソフト面でも、先ほどお話しさせていただきました「PMF」のほかに「札幌交響楽団」という道内唯一のプロオーケストラがございまして、PMFは、「札幌コンサートホール Kitara」ですとか「hitaru」、こういった所でのコンサートのほかに、街中でアウトリーチのコンサートなんかも行っておりますし、野外コンサート、ピクニックコンサートという気楽に聴ける

ものもあり、多彩なスタイルでのコンサートを展開しております。この期間中は、札幌だけではなく道内各地でアウトリーチのコンサートも行っております。スライドに掲載しておりますが、お隣の江別市の公演では、PMF の若手音楽家と江別市内の中学生が交流公演を行ったということもありました。

札幌交響楽団は 1961 年に発足いたしまして創立 58 年を迎えるオーケストラでありますけれども、昨年 9 月の大きな札幌胆振東部地震で被害を受けた厚真町で、その 1 年後に「復興支援コンサート」も行っております。右側の写真でございます。こういった全道各地で札幌の持っているソフト、これを道内全体に展開しているということでもあります。

「文化芸術立国」の実現ということで、先ほどの横浜市さん、京都市さんからもご紹介がございましたけれども、やはり未来への取り組みとして「次世代の担い手、子どもたちへの育成」というのが欠かせないと思っております。札幌市では、全部の小学校 5 年生は美術館に行く「子どもの美術体験」事業、6 年生は札幌コンサートホールで札幌交響楽団の生の演奏を鑑賞する事業、中学生は新しい劇場で青少年向けのバレエを鑑賞する事業ということで、生の、本物を全部の子どもたちに体験してもらっています。

比較的、北海道にいますと関東圏、関西圏に比べるとなかなかそういう機会がないものですから、札幌の子どもたちのみならず、周辺の、先ほど申しました連携中枢都市の子どもたちにも、これに参画をしてもらっています。それから、札幌は「ジュニア・ジャズ・スクール」というものを立ち上げて 20 年たちます。ここから世界的に活躍するミュージシャンと言いますか、アーティストも登場している、生まれてきているということがあります。

最後のスライドになりますけれども、北海道の冬はまさに雪と寒さが気候の特色である一方で、住んでいる人にとってはなかなか悩ましいものであります。観光の形で言いますと、最近では海外のお客さまは、冬、雪があつて来ていただける方が増えましたが、今までですと国内のお客さまは冬場になるとどうしても客足が落ちるということがありまして、この冬場の観光客増にどう結び付けていくかということが大きな課題でもありました。

先ほどお話ししました「雪まつり」というものもその一例であろうかと思いますが、ここでは「札幌国際芸術祭」を紹介させていただいています。「札幌国際芸術祭」の目指すところは創造的で多様な人や企業が集まり交流すること。そして文化意識、創造性が高まって多様性や寛容性がある街になること。これらが相互に作用することで、時代の変化を捉えて創造性を生かしたまちづくりにつながっていくことを目指しております。2014 年から 3 年に 1 度「トリエンナーレ」として開催しているところであります。1 回目、2 回目はそれぞれ夏から秋の、北海道でも気候のいい時期に開催してまいりましたが、3 回目、これは来年 2020 年なんですけど、ちょうど夏場が東京でオリンピック・パラリンピック 2020 大会があるということもありましたので、そういったことを含めて冬に開催しようということで準備を進めております。

全国各地にさまざまな芸術祭がございますけれども、やっぱり冬の芸術祭というのは北海道らしい、札幌らしいという典型なのではないかと思っております、それぞれの持ち味を

生かすための一番大きな違いというのは冬、雪だろうということで、冬に開催を行う予定であります。「雪まつり」とも連携しながら、芸術とさまざまな経済活動をつなげていきたいと思っております。北海道全体の「文化振興」あるいは「経済振興」、こういったものに、札幌の持っている力を発揮していきたいと考えているところであります。

渡辺氏（司会）：ありがとうございます。まさに素晴らしい自然環境そのものが芸術の完成の最後のピースになると言いますか、芸術そのものを受け入れる大きな器になるのではないかと、その芸術祭がとても楽しみです。北海道の雄大な自然に囲まれながら育つ子どもたちが、どんどん芸術を身に付け、文化を身に付けながら世界に羽ばたいていくというのは、きっとこの文化的な北海道という立地があつてこそだと思います。札幌の果たす役割ということも大変よく分かりました。ありがとうございました。続いて林市長、お願いいたします。

林氏：先ほど、横浜市民は、半数以上が劇場に足を運んだことがない、また、劇場に足を運んだことがある方も東京で鑑賞しているということを申し上げました。横浜市の18区の各区には、公会堂や区民文化センターがありますが、そこは、地域の文化芸術活動拠点であり、集客力の高い演目は、東京の劇場で見るという状況でした。

そこで、横浜市は「文化芸術立国の実現」に向けて、今までにない劇場、「オペラハウス」という言い方をしておりますが、総合舞台芸術の最高峰であるオペラとバレエを柱に、歌舞伎、宝塚歌劇団、劇団四季などを含め上演できる画期的な劇場を作りたいと考えています。まずは、現在の文化芸術を取り巻く横浜の環境をご紹介します。

横浜は160年前に開港して「ものはじめ」「ことはじめ」という意味では、西洋文明を初めて取り入れた港町ですが、ソフトの面で観光に資するようなものが非常に少ない。京都のお話を聞いても、札幌の大自然の中で繰り広げられている芸術活動を聞いても、横浜にはできないと思います。しかし、海や港、この特色を生かしてやれることがあると思っています。先ほどもお話ししましたが、横浜は、「文化」「観光」施策を一生懸命やっていくことで税収を上げようという考え方です。MICE施設についても、「パシフィコ横浜」の北側に「パシフィコ・ノース」を建てていて、すでに100件の予約が入っていますから、国際会議場として成長し続けると考えております。

エンターテインメント施設はないということを申し上げましたが、「ケン・コーポレーション」が、みなとみらいに2万席のポップス系のコンサートホール「Kアリーナ」を建設しています。

また、「ぴあアリーナMM」が2020年4月にオープンします。私が市長に就任した2009年から10年間、こんな話は全くありませんでした。つまり、横浜市に対する投資意欲がほとんどなかったということです。しかし、コツコツ、コツコツいろいろなことを進めたことで、「よし！それでは投資しよう」と、民間が100%投資でエンターテインメント系のアリーナを

造ることになりました。

次に、IRの実現に向けた話です。私は横浜でIRを実現させたいと考えています。場所は、山下ふ頭です。上場企業は東京に多く集まり、横浜の法人市民税収の低さが課題となっています。これから、少子高齢化でシニアも守っていかなくてはいけない。子どもたちも育てるためには、医療とか福祉、高齢者対策に大変お金がかかってくるのに、税収が行き詰まっています。横浜市の企業は、99.6%が中小企業です。東京には上場企業が集中しているわけです。

それから、横浜市は、観光客も日帰りが非常に多いです。8割の方が日帰りです。東京は5割です。日本全国の観光地も5割が宿泊されますが、横浜は17%ぐらいです。観光消費額が少ないということです。そのために、「ここに行けば絶対よそで見られないものがある」というものを作らなくてははいけません。そこで、私はIRをやっていくと言っています。

先日の国際的なイベント「ラグビー・ワールド・カップ」は、大成功に終わりました。一過性のものとせず、また、子どもたちの育成のために、芝の練習場も作ろうと決意しているところです。

さて、劇場の整備についてです。グラフから、劇場・ホールが、東京23区と比べていかに少ないかが分かります。人口100万人あたり、東京23区には5.7あるけれども横浜市には2.6しかありません。席数も、23区には人口100万人あたり1万席以上ありますが、横浜には4,000席しかありません。

続いて、有識者による検討委員会で提案いただいた新たな劇場整備の目標像です。総合舞台芸術の最高峰としての「オペラ」「バレエ」の日常的な上演、さらに、「舞台芸術におけるアジアの拠点」、優れた舞台芸術の人材育成、活性化の拠点を目指します。それから、次世代育成、文化芸術の国際的な交流の拠点としての役割も果たしていきます。一番大事なことは、健全な経営を維持すること、そして、賑わいや街づくり、経済活性化の拠点にするということです。

今、私が考えておりますのは、他の世界の劇場に引けを取らない、新たな劇場をつくりたいということです。欧州の「ウィーン国立歌劇場」や「ミラノ・スカラ座」など、さまざまな劇場と話をしております。最近も海外の劇場の総裁からお手紙をいただいて、「6年前にお会いした時、あなたは夢を語っていたけれど、本当にやるのですね。そうであれば、上海の劇場を作ったエンジニアを派遣してもいいですよ。」という好意的なお手紙をいただきました。海外を参考に、勉強したいと思います。

海外の「オペラハウス」は、かつてのクラシックな建物ではなく、新しくなっています。アジアの伝統的な舞台芸術、新進気鋭のアーティストも注目されるべきです。私は「バレエ」は全て日本人でも上演できると思います。日本人の感性は、素晴らしいものです。日本人でやり抜く「バレエ」で、バレエ界を改革していきたいと思います。例えば、日本のプリンシパルで素晴らしい踊りをする人が実はアルバイトをしていると聞きました。日本では子どもの頃からバレエを見る習慣がありません。ですから、美しい日本人の感性を表現できるよ

うなバレエを創っていきたいと考えています。

指定都市には、札幌の「hitaru」をはじめ、とても素晴らしい劇場が多くあります。指定都市でネットワークを組んで、例えば制作費が高い「オペラ」や「バレエ」を共同制作するのもあると思います。オペラやバレエは経費がかかります。国の支援がないとどうしようもないと思います。文化庁の予算は昨年 1,200 億円でした。しかし、そのうちの 65%が文化財保護になります。京都の街を守り抜くのは大変だと思います。

最後にまとめとしてお話しいたします。文化芸術は、その本質的な価値と共に、インバウンドを含めた観光誘客、街づくりなどの多面的効果があります。国の成長戦略として、しっかり位置付けることが必要です。次に、民間企業による「文化芸術」の支援が日本は非常に少ないです。一過性の冠を付けたような公演しかありませんので、民間の投資力を高める必要があります。

次に次世代の育成です。実演団体の人材育成、活性化について、ヨーロッパでは劇場が「バレエ」「オペラ」「オーケストラ」などの実演団体を所有しています。

そして、文化芸術への投資です。国の予算の拡大はお願いしたいと思います。先ほど冒頭で渡辺さんが「各国の予算と比べて日本は少ない」とおっしゃっていましたが、先進諸国並みの予算が必要です。

指定都市市長会の部会長を務めてくださっている京都市長が大変力強く取り組んでいるので務め、指定都市の市長の意識が変わって、ネットワークを組もうとなっております。以上でございます。

(拍手)

渡辺氏（司会）：ありがとうございました。ご存知のとおり世界中でクルージングというのは非常に隆盛になっておりまして、横浜は海に開けた世界中の文化の交差点のような、横浜にたくさんの船が来ることによって、そして横浜でしか見られないコンテンツ、劇場が増えるということでコンテンツを見られるということで、また日本中に観光客の皆さま方が、日本の文化を知るといった目的のために来ていただくというのは非常に大きな構想で、望ましいことだなというふうに拝聴いたしました。

濃いお話を伺ってまいりました。大変残念ではございますがそろそろお時間も近づいてまいりましたので、最後に市長の皆さま方からこのシンポジウムに、皆さまにぜひこれだけはお伝えしたいと思われること、皆さまへのメッセージ等々お聞かせいただければと存じます。それではお席の順に、秋元市長からお願いいたします。

秋元氏：はい。今日はこういう貴重なお時間を頂戴できまして本当にありがとうございます。横浜市さん、そして京都市さんのそれぞれ特徴を持った、まさに日本を代表するような文化都市の市長さんと一緒に、こうやってお話ができたということに感謝しておりますけれど

も、今日出席されていない都市もいいものがたくさんあると思います。そういう意味では、日本の持っている文化というのは、日常的な生活の延長線の中で我々の生活の中から生まれたもの、新たに何か、例えば見るため、観光のために作られたものではなくて、それぞれの地域やその生活に根差したものであろうかというふうに思います。ですから、その地域性なり生活を大切にしながら延長の中で心を豊かにしていく、それがまた経済活動、例えば観光と文化芸術がつながるとか、そういった経済的な発展にも必ずつながっていくと思っていますし、そういう意味では投資をしつつ、回収していけるように、また、今日の大事なテーマとして、やはりそれぞれの持っているものをネットワークしていくということが重要なと思っています。

引き続き政令都市の市長会議の中でそれぞれの持っている良さをつなぎ、補完し合いながら、日本全体の文化の発展に貢献していければなど、このように思っているところです。引き続き皆さま方のお力添えもご協力もお願いできればと思います。ありがとうございました。

(拍手)

渡辺氏（司会）：ありがとうございました。続きまして門川市長、お願いいたします。

門川氏：ありがとうございます。それぞれの都市の個性が伝わり、本当に楽しませていただくと同時に、つながることの大事さを痛感いたしました。京都の食文化は評価されていますが、「にしんそば」は、北海道の昆布なしに考えられません。だから、「にしんそばは京都」というのはおいしい。にしんもそばも昆布だしも京都だけのものではありません。こういう意味でつながって、つながって、やっていくことは大事だなと思っています。

もう一点、この12月12日から「国連 観光・文化京都会議2019 将来世代への投資 ～観光×文化×SDGs～」という会議が、日本で初めて開催されます。国連世界観光機関とユネスコが一緒になって、日本では文化庁と観光庁が一緒になっての開催です。今回が4回目となりますが、これまで比較的発展途上の国で開催されてきました。先進国での開催は初めてとなります。地域の文化、コミュニティを大事にした観光という「観光・文化京都宣言」を発信していきたい。そして、観光と文化の力で、あらゆる社会的課題の解決に貢献していく。こういうことをしっかりとやっていこう。来年4月には「コンGRES」、犯罪防止刑事司法会議が、京都で2度目に開かれる。そして文化とその寛容、そして犯罪を犯した人が再び犯罪を起こさない、再犯防止で社会で受け入れていく。2度目の開催はジュネーブと京都だけです。

最後に人を育てるというのがいかに大事かということです。札幌も横浜も「ラグビー・ワールド・カップ」すごかったのですが、オール日本代表のチーム31人は実にダイバーシティ、多様性ですね。日本の小中学校で過ごされた方は16人だと言われてます。そのうちの4人

が京都市立中学校出身なんです。

(笑)

門川氏：ちょっとええでしょ？ それから、あのスクラム…長谷川さんね、あの人も京都市立中学校出身です。人を育てる京都でありたい。文化芸術も含めて。立派なスタジアムは京都にはないんですけど、人を育てることがスポーツでも文化でも大事だなと、そんなことを感じております。ありがとうございます。

(拍手)

渡辺氏（司会）：ありがとうございました。では最後に林市長、お願いいたします。

林氏：今日はお聴きいただきましてありがとうございました。私も5歳ぐらいのときから父に歌舞伎座に連れていってもらい、日本の伝統芸能を見る習慣があって、いまだに好きです。大変悲しく思うのは、海外に行くと、街の人がオペラ、バレエ、クラシックのシンフォニーを自由に楽しんでいます。しかし、日本では、例えば伝統芸能の「能」、「狂言」、「日本舞踊」、「歌舞伎」がありますが、これらは一部の方が見るという空気感があるように思います。指定都市市長会は、20 都市が団結し国に対して指定都市の様々な提案をし、それについては大変耳を傾けていただき、実現していただくことも多いです。今日、お話を聴いていただきましたが、他の都市でも熱心に「文化芸術」を考えられている市長もおりますので、これからも協力していきたいと考えております。

皆様に一つお願いします。

市政がいま、どのようなことをやっているのかというのが、中々市民の方に伝わりません。どうしたら私共がやっている行政について、お伝えできるのかということが悩みです。広告宣伝をやればある程度知っていただけたと思いますが、税金をお預かりしていますから、簡単にはできません。

ぜひ、このように基礎自治体の活動に触れる機会がございましたら、周りの方にお伝えいただきたい、そういうお願いです。今日はどうもありがとうございます。

(拍手)

渡辺氏（司会）：ありがとうございました。各市の「文化芸術施策」の取り組み、そして「文化芸術立国」の実現に向けた意気込みを伺いました。パネルディスカッションで三市長がおっしゃいましたことを集約いたしますと、一つは大都市における「文化芸術」という存在が、

国内からだけではなくて世界中からさまざまなバックグラウンドを持った多様な方々を引きつけるんだということ。そしてその引きつけるということが都市にとって、その都市にとって持続可能な発展につながっていくんだということ。そしてもう一つは、大都市にはあらゆる政策分野と連動して「文化芸術政策」を展開することができる力があるのだということ。全国をリードして、また連携して、手をつないでという言葉が出ましたが、連携して展開していくべき立場でもあって、そのように、お三方とも必ずしていくんだという意気込みを今日は非常に間近に感じました。

司会の立場ではございますが、本当に市長さま皆さま方のその地域を体現なさる皆さま方で、スライドを見ながら「ああ、札幌に行きたいなー」とか「ああ、京都に行きたいなー」とか、地元ではございますが「横浜を散歩したいな」と。

やはり残間さんのお話にもありましたけれども、文化というのは観光のための観光ではなくて、暮らしそのものであって、そこに行って触れるもの、感じるものだと思いますので、ぜひ、皆さま方も足を運んでいただけたらと思います。本日もご臨席賜りました皆さまも「文化芸術立国」に向けた指定都市の役割についてご理解を深めていただく一助となりましたら、私共、本当に幸いに嬉しく存じます。

長い時間になりましたがご静聴いただきまして本当にありがとうございました。以上にてパネルディスカッションを終了いたします。どうぞ、ご降壇いただきますので拍手でお見送りくださいませ。

(拍手)

渡辺氏（司会）：林市長、門川市長、秋元市長、本当にありがとうございました。

(拍手)

渡辺氏（司会）：それでは、これにて本日の『指定都市市長会シンポジウム』お開きとさせていただきます。お越しくださしまして本当にありがとうございました。どうぞお忘れ物のございませんようお気を付けてお帰りくださいませ。そしてお配りいたしましたアンケートでございますが、今後のためにもぜひご協力をよろしくお願い申し上げます。受付にて回収をさせていただければと存じます。重ねまして、本日は最後までお付き合いくださいまして誠にありがとうございました。また『指定都市市長会シンポジウム』開催いたしますので、お運びいただければ大変幸いに存じます。ありがとうございました。

(拍手)